

特別支援学級部会

<県研究主題>

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案1

提案者 佐々木 眞知子 (相模原地区)

<研究主題>

インクルーシブ教育に向けた交流教育のあり方～弥栄中学校の交流実践から見えてくるもの～

1. 提案内容

(1) 実践の重点

交流教育を推進する上で、次の①～⑥の内容で充実を図った。

- ①生徒同士の理解
- ②教職員の理解
- ③企画会・職員会議の活用
- ④特別支援学級の役割
- ⑤支援教育コーディネーターとの連携
- ⑥学校運営における管理職との連携

(2) 実践の内容

「校内での交流」

- ①全職員への共通理解
- ②学級開きでの自己紹介
- ③読書・朝の会 (週2回)
- ④交流昼食
- ⑤交流授業
- ⑥通常の学級の先生による授業

やえい級の生徒に対しての共通理解

- ・自立に向けてほめて指導している。
- ・人に迷惑をかける、危険な行動をとる、約束を守らない、などの行動には厳しく注意する。
- ・前向きな言葉を選んで発言している。「～しちゃダメ」ではなく「こうするともっとよくなるよ」という。
- ・自分でできることはなるべくやらせるようにしている。時間がかかっても自分でやるように仕向け、職員は見守るようにし、できたら「よくできたね」とほめるようにしている。
- ・名前は「～さん」で呼ぶようにしている。
- ・元気に笑顔で接することを心がけている。
- ・朝のあいさつは「～さんおはよう」と声かけするようにしている。
(職員会議で提案)

- ・書写・・・毎週手本を見て丁寧に書く練習をし、上達した。
- ・数学・・・週2回、グループ別学習で、パズルなどを取り入れ、楽しくできた。
- ・理科・・・理科室でガスバーナーの使い方や花の観察などの実験ができた。
- ・英語・・・2人の先生とALTの先生がきてくれ、歌やゲームを中心に行った。
23年度は英語の劇に挑戦した。
- ・体育・・・週1回、淵野辺公園に行き、アスレチックなどで運動した。
- ・作業1・・・技術科で、野菜作りや木工工作を行った。
- ・作業2・・・家庭科で、縫い物(袋やクリスマスのくつした)や広告を使った籠作りなどを行った。
- ・生活1・・・理科の先生だが、ストレッチやエアロビクスで運動をした。
- ・生活2・・・理科の先生だが、身近にある物を使った工作を行った。

- ⑦学校祭体育部門
- ⑧1年生の「わかあゆ体験学習」
- ⑨2年生の職場体験
- ⑩3年生の修学旅行⑪百人一首大会（1年）、球技大会（全学年）

「他校・他団体との交流」

- ①由野台中との交流
- ②相陽中との交流
- ③「お話クレヨン」による読み聞かせ
- ④やえい級独自の職場体験
- ⑤パソコンボランティア
- ⑥中学校区の小学校との交流会
- ⑦相模原中央支援学校との「ふれあい合同学芸会」の取り組み
- ⑧「アクセスホームさくらとの音楽会」
- ⑨東北支援文化事業「福島で元気を！」への参加

（3）成果

多くの先生方が生徒に対し共通理解を持って接することができたことが成果に繋がった。通常の学級の生徒が、特別支援学級に教科の交流にくることもあった。

2. 協議内容

〔参考にした点〕

- ・交流について様々な取り組みがされている。
- ・特別支援学校等地域の資源を利用した取り組みがよい。
- ・他の職員にていねいな説明をしているところがよい。
- ・東北支援文化事業への参加など他の団体と積極的に取り組んでいるのがよい。
- ・管理職やコーディネータなどが積極的に関わり学校全体で組織的に取り組んでいるのがよい。

〔工夫・改善のためのアイデア〕

- ・通常の学級で交流の内容を企画する取り組みを行っている。
- ・希望者を募り、特別支援学級と通常の学級の生徒が一泊二日の宿泊体験を実施している。
- ・通常学級の学年会に特別支援学級の担任が参加し、特別支援学級の生徒のようすを話す機会を持つ。

3. まとめ

これまでの取り組みのなかでいろいろご苦労があったが、少しずつ成果となって現在にいたっているのがわかる発表であった。どの学校にも言えることであるが、交流教育については特別支援学級担任のみが抱えるものではなく、学校全体で組織的に取り組んでいかねばならず、そのためには管理職がリーダーシップを発揮していく必要がある課題であると捉えている。

<研究主題>

一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育課程の編成

及び指導の在り方に関する実践的研究

1 提案内容

小・中学校において、障がい種別や障がいの有無に関わらず、一人ひとりの教育的ニーズに応じた多様で柔軟な支援を実施していくことが重要であると考えられる。そのため、本校では、数年前から全校体制で支援教育の推進を図ってきた。

(1) 研究方法**a：特別支援学級における類型化による教育課程の編成**

生徒一人ひとりのニーズに応じた教育課程を編成するため、生徒の実態を考慮してAからDまでの4つのタイプに在校生を類型化して、教育課程を編成した。類型化の基準として「太田ステージ」(太田・永井、1992)やWISC-IIIの結果を参考とした。

b：通常の学級に在籍する特別な教育的ニーズのある生徒に対する個別の学習支援

全職員の理解と協力を得て、学習上困難を示す生徒や集団での学習場面で緊張が高い生徒などを対象として「授業時間内での別室での個別指導」を、学習困難を示していない生徒も含めて全校生徒を対象に「昼休みの学習会」を実施した。

c：通常の学級における教室環境整備—「〇〇中スタンダード」の作成—

「〇〇中スタンダード」を作成することで、どの生徒も安心して学校生活を送ることができ、学習に集中して取り組みやすい環境を整えることができると考えた。

(2) 実践と結果**a：特別支援学級における類型化による教育課程の編成**

Aタイプの生徒は、ほとんどの教科で交流または特別支援学級で該当学年の教科学習を実施。Bタイプの生徒は、主に国語、数学、英語の授業を特別支援学級で、Cタイプの生徒は技能教科で交流を実施し、その他の教科と生活単元学習を特別支援学級で、Dタイプの生徒は、生活単元学習や作業学習を中心に教育課程を編成し、ほとんどの授業を特別支援学級で行っている。

b：通常の学級に在籍する特別な教育的ニーズのある生徒に対する個別の学習支援

「授業時間内に別室での個別支援」は、支援を始める際に必要に応じてWISC-IIIを行い、認知特性に応じた手立てを示し、教科担当者と支援級担当者の役割分担を明確にし教科担当者が個別の指導計画を作成し課題を用意することで、どの生徒も意欲的に学習に取り組み、通常の学級の授業に復帰した生徒や定期試験で高得点をあげる生徒も出ている。「昼休みの学習会」は、学カステップアップ支援員だけでなく支援教育担当教員も1名加わっている。

c：通常の学級における教室環境整備—「〇〇中スタンダード」の作成—

通常の学級や特別教室における教室環境の内容と基準を作成し統一することとし、『構造化(視覚支援)』『座席の位置』『刺激量の調整』『ルールの明確化』『相互理解の工夫』を行った。

2 協議内容

協議の柱を「アセスメントとグルーピング、指導体制の工夫・改善」とし、提案をうけての感想や参考になりたい点と、自校での取り組み等を踏まえて工夫・改善のためのアイデアについて、4つのグループに分かれて協議を行った。

◎感想：教師側に専門的な知識が必要。根拠に基づいて行われている。他の先生方の協力体制が素晴らしい。学校全体で取り組んでいる様子がよく分かる。通常の学級の生徒にも配慮さ

れている。構造化されているので通常の学級に在籍している発達障害の生徒も安心できるだろうし、交流している特別支援学級在籍の生徒にも優しい環境になっている。

家庭の考え方などから検査すること自体が難しい場合もあるので、どこの学校でもできることではないのではないかな。

◎工夫・改善：S-M 社会生活能力検査をやっている。保護者の理解がないと難しい部分がある。同じ学級の中でも様々なタイプの生徒がいるので、試行錯誤しながら工夫している。教員がきちんと理解をしないとここまでのことができないので、教員が研修をすることが必要。全校生徒を対象として支援を行う場合、希望をしていない生徒へのアプローチの仕方を考えなければいけない。

3 指導助言

近年、特別支援学級の在籍は増える傾向にあり、特別支援学校の高等部への入学希望者が増えている。その中で、学校全体の取り組みとして類型化がされている。その子にあった支援をしていくために、どうすればいいか、大きな課題である。教育における尺度としていろいろな形のテストがあるが、この尺度をどう使っていくか、考えていかなければいけない。特別支援学級に在籍する生徒には、知的な障害を伴わない生徒もいる。将来の自立に向けて、中学校での三年間は大きな役割を果たすものである。特別支援学校ではなく地域の学校に進学をしたいと考える家庭では、通常のクラスでいろいろな生徒達との関わりを通して社会性を身につけたいという思いが強いので、本人はもちろん、保護者も卒業後どうするか、そのイメージを大切にしながら支援をしていく必要がある。

2 まとめ

アセスメントは過去、現在を含めての状況を知るためのもので、将来の見立てをするのに役立つ。どのような課題があるのかを知り、視点を他と共有することがよりよい支援につながる。「共通の視点」が重要である。ユニバーサルデザインや構造化についても共通理解することが大切である。中学校は義務教育の出口である。特別支援学校の高等部は、通常の学校を卒業した生徒でも希望者が多いのが現状である。特別支援学校の高等部を卒業したら、大学への進学はほとんどない。障害者枠での採用から一般企業への就職も増えてきているが、せっかく就職できても、それまでの積み重ねがないために会社を辞めてしまうケースも見られる。小学校や中学校での生活を充実させておくことが必要になる。先のことを見通していろいろな力を小学校、中学校でつけてあげて欲しい。